OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

1．報告書の刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催「言語文化共同研究プロジェクト」の報告書のひとつである。ただし、私たちの共同研究はこれまで10年間継続してきたもので、報告書も今回で10巻目になる。この共同研究は、研究科教員と大学院生および博士申請資格者をおもなメンバーとする定例の研究会、私たちがPCFと呼び慣わしている「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会を基盤としている。この研究会はさらに、1996年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会CSC（カルチュラル・スタディーズ・サークル）を前身としている。これまで、これらの研究会のメンバーが中心になり、『ポストコロニアル文学の現在』（2004年、晃洋書房）や、『英語文学の越境――ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から――』（2010年、英宝社）などの書物も出版してきた。

近現代のさまざまな文化の形成は、広い意味での近代植民地主義の投げかける長い影のなかで行われてきたといえる。それはとくに、ポストコロニアル文化、移民文化、先住民文化などに明らかだが、現代の「グローバル・カルチャー」でさえその例外ではないだろう。また、大英帝国の宗主国イギリスの文化、あるいは明治期以降の日本の文化も、そのけっして小さくない部分が、近代植民地主義の大きな流れのなかで形成され、変化してきたといえる。これらの多様な文化の形成について考察すること、それを通して、これらの文化に対する私たちの視座や批評をつねに形成し直していくこと、それが研究会の命名に込めた意図である。

この研究会には、言語文化研究科を修了し、すでに各地の大学の教職についているものなど、研究科の制度の上では正規メンバーではない仲間も数多く参加している。しかしこれらの仲間を抜きにして、この研究会は成立し得ない。毎年のことながら、この報告書はその最初の読者として、まずこれらの仲間たちに送り届けたいと思う。

2．2014年度のPCFの活動

PCFは、その発足時から、基本的に研究書や論文の批評会というかたちを取ってきた。それらの論文は広くいえばポストコロニアル研究と呼べるものが多いが、細分化すれば、帝国主義論、植民地文化論、ポストコロニアル文化論、移民文化論、先住民文化論、グローバリゼーション論など多種多様である。ほぼ月1回のペースで、土曜日の午後に開いて

いる。2名の担当者がそれぞれの論文の内容を紹介・検討した後、全体討論に入る。このようにして、論文の趣旨や意義、欠点や盲点をさまざまな面から議論し、理解を深めていく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2014 年度はやや例外的に、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Chakravorty Spivak）の *An Aesthetic Education in the Era of Globalization* (Harvard University Press, 2012) を集中的に取り上げた。1980 年代からポストコロニアル理論をリードしてきたスピヴァクであるが、この近著は、グローバリゼーション問題に正面から取り組み、グローバリゼーション時代におけるポストコロニアル文化の研究や、その教育の可能性を探ったものである。私たちにとって重要な書物であることは間違いないが、600 ページ近い大著であり、また彼女の文章は難解をもって知られる。それを全巻読破しようという企てである。

2014 年度は 9 回の研究会を開き、序文と 25 章からなるこの本の約 3 分の 2 を検討し終えた。以下にその記録を残しておきたい。開催日、章タイトルとページ数、担当者の順に示す。

1. 2014 年 4 月 26 日
Chapter 1 “The Burden of English,” pp.35-56. 木村茂雄
Chapter 4 “The Double Bind Starts to Kick In,” pp.97-118. 小杉世
2. 2014 年 5 月 31 日
Chapter 2 “Who Claims Alterity?” pp.57-72. 花井晶子
Chapter 5 “Culture: Situating Feminism,” pp.119-136. 松本ユキ
3. 2014 年 6 月 21 日
Chapter 6 “Teaching for the Times,” pp.137-157. 松本承子
Chapter 17 “Reading with Stuart Hall in 'Pure' Literary Terms,” pp.351-371. 稲垣健志
4. 2014 年 7 月 26 日
Chapter 11 “Translation as Culture,” pp.241-255. 霜鳥慶邦
Chapter 19 “Harlem,” pp.399-428. 古東佐知子
5. 2014 年 9 月 6 日（名古屋大例会）
Chapter 3 “How to Read a ‘Culturally Different’ Book,” pp.73-96. 加瀬佳代子
Chapter 13 “Nationalism and the Imagination,” pp.275-300. 村上八重子
6. 2014 年 10 月 25 日
“Introduction,” pp. 1-34. 伊勢芳夫
Chapter 12 “Translating into English,” pp. 256-274. 歳岡冴香
7. 2014 年 12 月 13 日
Chapter 22 “The Stakes of a World Literature,” pp.455-466. 木村茂雄
Chapter 23 “Rethinking Comparatism,” pp.467-483. 小杉世
8. 2015 年 1 月 31 日

Chapter 8 “Supplementing Marxism,” pp.182-190.　森野豊
Chapter 23 “World Systems and the Creole,” pp.443-454.　古東佐知子
9. 2015年3月14日
Chapter 9 “What's Left of Theory?” pp.191-217.　杉浦清文
Chapter 24 “Sign and Trace,” pp.484-499.　霜鳥慶邦

3．私たちとグローバリゼーション

スピヴァクは、現代のグローバリゼーションは、そのほとんどが「危機に突き動かされるグローバリゼーション（crisis-driven globalization）」に陥っていることを批判し、その一方で、「美的教育」すなわち「認識の遂行のための想像力のトレーニング」の重要性を訴えている。詳細は別な機会に論じたいと思うが、とりあえず私なりにまとめ直すなら、危機に追い立てられ、経済や政治の計算により対応するグローバリゼーションを、少しでも修正・是正・代補し、人間化していこうとするなら、この時代・この世界に応じた想像力のトレーニングを積み重ねることにより、私たちとグローバリゼーションとの関係を辛抱強く探っていくこと、それ以外に方法はないということになるだろう。あるいは、遠回りで即効性はないかもしれないそのような努力が、究極的には最善の努力なのだと主張しているように思われる。

一時期、グローバリゼーションは現実にあるか・ないか、良いことか・悪いことかといった議論がよくなされたが、いまは多分、そのような話だけでは済まされないにちがいない。私たち一人ひとりが、グローバリゼーションのプロセスにあまりにも深く巻き込まれてしまっているからだ。しかしこのプロセスは、スピヴァクの文章も伝えるとおり、非常に多面的かつ分裂的なプロセスでもある。それを統一的なものとして想像するのは至難の業である。しかし、「私たちとグローバリゼーション」の関係をより綿密に検討し、より深く想像していくことは、植民地文化／ポストコロニアル文化の多様な形成を考察するPCFにとっても、ますます重要性を増していくにちがいない。2015年度のPCFも、盛夏が訪れるころまで、このスピヴァクに取り組んでいく予定である。

木村　茂雄